

アートがおこす自分や他者への変化を体感し 社会とかかわりながら「表現」する力を育む

自分たちが表現することで何かが変わるかもしれない。授業のなかでそんなアートの可能性を生徒が感じることは、その生徒たちが社会やコミュニティーに能動的にかかわって生きていこうとするきっかけにもなることでした。

取材・文／松井大助
撮影／平野愛



芸術科美術
浅野吉英先生

1959年生まれ。美術の教員として、創造のためのコミュニケーション力を育てる対話型ワークショップや、地域でのアートおこし、授業のなかでのアートおこしに注力。生徒指導部長、学年主任、現在は総合学科推進部で産社を担当するなど、学校運営にも積極的にかかわっている。

「アート、生まれてるやん」
と授業を通して感じさせたい

西宮今津高校に勤務する浅野先生の授業実践の一つに、彫刻と植物を組み合わせた作品づくりがある。用意する材料は、アトフラワーの土台に使われるオアシスという四角い塊。それを削って生徒たちが彫刻をつくり、好きなところに植物の種を植え込む。ひとまず完成したら、作品を窓のそばに置き、水をやりながら見守る。すると自分の彫刻作品からしだいに草が生えてくる、という寸法だ。

生徒たちは、彫刻をやった経験はあっても、案外そのときの自分の作品をよく見ていない。小学生のころに植物観察はしていても、その植物の成長がまわりにも変化を及ぼすことはまず実感していない。だから、いつ草が生えるかと楽しみに待ちながら自分の作品を眺め続け、植物が芽吹いて成長するにつれ作品の雰囲気も変わるのを目にすると、「不思議な味わい」を感じる。自分がやったことだけだと、やってみたら、この世界にも、自分の心境にも「何か変なことが起きた」。

アート、生まれてるやん。
浅野先生がやろうとしてるのは、そんな「アートおこし」の美術教育だ。

そもそも芸術やアートとは何なのだろう。浅野先生はこう思う。人が生きているなかで何かに出逢い、そこに意味や形を与えようとする、芸術になるのではない。特に役立つことはないかもしれない。で



作品について感じたことを、先生にうながされて生徒たちが自由に語る。

も「その表現によって、自分や周囲の何かが変わるかもしれない」。生徒「人ひとりの内側にそんな芸術の火種を点すことが、浅野先生の目標だ。

そのための土台として、浅野先生は普段の授業から、生徒との対話を深めることを意識している。作品鑑賞のときなどに「これなんやろ?」としれっと生徒に投げかけ、何か言えは「そう思ったのはなんで?」とさらに尋ねる。ほかの生徒にも「同じように思う?」「思えんのかならなんぞ?」と問いかける。いまこの瞬間に感じたことを、言葉にして外に出せるようになってほしいからだ。

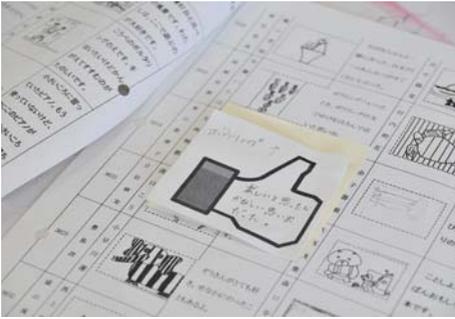
生徒のベースにあるものを否定しないことも重視する。助言は「これはあかん」ではなく、「ここに何かを加えたり減らしたりしたら別の可能性が生まれるんじゃない?」。技術はあったほうがいいが、授業で

その習得を厳しくは追求しない。

「高校生つて、将来こんなことをやるだろう、という原型になるものを、すでに始めていると僕は思うんです。ふとした体験から何かをつかみ、何となくこうしたくなる、といったものを。そこを伸ばしたいですね。芸術大学に行きたい子がいたら、デッサン力などは授業の外でみがいてもらいます。それよりも授業では、自分のつくったものが本人や他者に何かをもたらす、という体験をさせたい。そのときに、生徒は将来の方向性につながる大切なものになれる気がするんです。大学などに進んでから一番困るのは、技術や知識はあっても、自分のやりたいことがわからない子だと思います」

自作や協働のアートが 他者に何かをもたらす体験を

自分のつくったものが何をもたらすか、



イラストコンクールのために地元の子どもたちが描いた原画を一覧にしたプリント。そのなかから生徒一人ひとりが気に入ったものを選び、何がよいと思ったのか、その理由を記した。



選んだ原画をもとに、高校生が拡大・色付けしたボードを制作。子どもでもなく、大人でもない不思議な味わいの作品になる。



「今津プロデュース」の授業の一環として地域限定グッズを生徒たちが企画し、商品化を目指す活動も進められている。ぬり絵ができるぬりecoバッグなどのアイデアが生まれた。

今津プロデュース 指導計画(45時間)

第1次	3時間	昨年度の授業紹介、アートプロジェクトを知る、西宮や今津地域の現状・文化を知る
第2次	2時間	えべっさんの物語を考える
第3次	4時間	イラストコンクールからアートプロジェクトまでの全体の流れを考える。役割を決める
第4次	5時間	商店街のフィールドワーク、商店街の方の話、西宮の失われた芸能「えびすかき」の実演
第5次	3時間	イラストコンクールの選考に当たっての評価基準を出し合う。入選作品の選考をする
第6次	12時間	拡大デザインボードの制作、プロジェクトの準備
第7次	1時間	展示開始直後の振り返り
第8次	2時間	「たてじまえんにち」の準備
第9次	3時間	プロジェクト終了後の振り返り、えべっさん、傀儡師、文楽についてさらに深く考える
第10次	8時間	たてじま作品を使った商品の企画をボードに作成する
第11次	1時間	地元発信商品企画発表会
第12次	1時間	年間の振り返り、まとめ

「この年より、生徒たちのアートの実践全体を「たてじまアートプロジェクト」と呼ぶようになる。翌年からは、地元にかつてえびす様の人形をあやつる大道芸があったことを踏まえて、生徒たちがみんなで物語を考え、フィギュアを用いた「現代版えびすかき」を創作、住民の前で披露することも行うようになった。

「生徒たちは『自分のつくったものなんてそんなに価値がない』と思っています。でもやってみると、商店街の人から感謝されたり、子どもからデザインボードについて「かわいいー」と言われたりします。そのなかで「アートつて、人を喜ばせたり元気にしたりする力があるのかな?」と感じていきます。そうしてアートの可能性を信じられるようになれば、「ここに自分がいることで何ができるだろう」と、社会やコミュニティーへのかわり方も変わってくると思うのです」

「いつてみれば「今津プロデュース」は、アートの可能性を感じるとともに、生徒たちが、自分ですべてに社会参加する力があることを実感する場でもあるのだ。

兵庫・県立 西宮今津高校



School Data

総合学科/1977年創立
生徒数(2013年度)700人
(男子271人・女子429人)
進路状況(2012年度実績)大学56%・短大16%
専門学校等16%・就職3%・その他9%
兵庫県西宮市浜甲子園4-1-5
TEL 0798-45-1941
URL <http://www.hyogo-c.ed.jp/~imazu-hs/>

Outline

兵庫県西宮南西部に位置し、同校より北東約900m先には甲子園球場がある。普通科高校として設立されたが、2007年より総合学科に移行。「自然科学」「人文国際」「スポーツ・芸術」「情報SSC」「社会科学」「生活文化」と6ジャンルのなかに多様な選択科目をそろえ、生徒がどのジャンルからも個々の興味・関心に合わせて自由に学べる環境を提供している。アジア地域との国際交流や、大阪大学をはじめとする大学との連携授業にも力を入れる。



HINT & TIPS

1 アートに心動かされる瞬間を授業のなかで生み出す

授業で浅野先生は、知識や技術を教えるだけでなく、生徒の心が動くことを目指す。生徒が創作に「不思議な味わい」を感じられるように課題を工夫。生徒評価ではルーブリック評価の観点を取り入れ、知識・技術の面だけでなく、生徒の制作への取り組み方、他者に伝えようとする姿勢も見ようとしている。

2 感じたことやひらめいたことを表明・表現しやすい場をつくる

対話重視の浅野先生だが、いきなりグループワークは行わない。生徒同士の関係によっては安心して話せる場にならないからだ。教師からの問いかけに答えてもらったり、組み合わせに配慮した二人組で話し合わせたりして、徐々に対話に慣れさせる。アニメなど、生徒になじみのあるものをアートの視点で語らせる工夫も。

3 場所から喚起される想像力を生徒に求めて形にさせる

生徒が地域の歴史や文化を調べ、そこからイメージをふくらませてアートを生み出すことに、浅野先生は力を入れる。その行為は、身のまわりのことで見過ごしていた課題や価値を「見える化」することであり、さまざまな場面に応用できるからだ。生徒たちが住んでいる場所に対する尊厳を回復することにもつながる。

4 生徒一人ひとりの作品が他者に何かをもたらす機会をつくる

他者とかかわるような生徒の制作活動を、浅野先生はコツコツと広げている。デザインボードなどをつくる「今津プロデュース」も、個別に商店街の人に相談して理解を得るところから始まった。生徒の作品を教師が評価するだけでは、それはただの提出物。生徒に「アートで何かを変えられるかも」という感覚は芽生えにくい。

授業ができるまで

誰もがこの世界に向けて表現できるようなアートを

高校時代、美術部にいた浅野先生は、部の先輩に誘われて創作劇をやることになった。文化祭で上演し、評判を呼ぶと、味をしめて、新たな劇を神社でも上演！それらの体験のなかで「何かを表現することで自分や周囲の状況が変わるかもしれない」という感触をつかむ。浅野先生にとつての「アートおこし」の原点だ。

大学は農学部に進んだが、好きな美術にかかわりたいと思い、教育学部の美術専攻に転部、卒業して教師となり、特別支援学校に配属された。このことがまた、浅野先生の美術教育に影響を与えた。「重度の障害を抱える子とも接するうちに、技術をみがかないと芸術にならないから、そこに希望はないな、と思ったんですよ。寝たきりの子でも外に向けて表現できて、本人もそれを楽しめる。誰もがこの世界で自分を表現できるし、あらゆるところから芸術は生まれる。芸術やアートはそうあってほしい、と」

その後、赴任した、荒れていた高校でも、美術教育のあり方を考えさせられる。現代アートをビデオで見せたら、ある生徒が「今見たアートはすごいが、授業はおもしろくない」と言い放った。学校を辞めたがつている子が「辞めてアートをやりたい」というので学校にいれば自分が美術を教えられると伝えたら「そういうのじゃない」と返された。シヨクだった。でも浅野先生は「アートは感動できるもの、という期待があるからこそ」と考えた。ならば「生徒の心が動かない授業をしてはあかん」と。そこでまず意識したのは、教師自らが創造しようという姿勢で授業にのぞむことだった。肖像画の説明の際に、黒板にチョークで全力で絵を描く、といった具合に。生徒が生徒自身の創作に心動かされることも目指した。アホ、ボケ、カスなど「汚い言葉」を使いたがる生徒たちに、浅野先生はその言葉を自由に書かせて「美しい色」で塗らせる試みをした。そのアンパランスさが生徒の何かを刺激したのである。当初騒いでいた生徒たちは、色を塗り進めるうちに静かになっていった。ある生徒はつぶやいた。「このアホはきれい」。

一人の技術で創作するのではなく、みんなでも対話しながら、課題をみついたり、発想を広げたりして、全員で創作する活動にも力を入れた。今の高校生には、お互いに感じたことを気軽に話せるような場が少なく、もっと、相互に刺激を受ける楽しさを味わってほしかったからだ。

また、現代アートでも参加型が志向されていて、創造のプロセスに多数の人が参加するなかで各自が変化や喜びを得ることをアートというならば「教育活動はまさにその現代アートをすることに変わりないのではないかと感じたからでもある」。

「右肩がりの時代は、新しい刺激やサービスは放つておいても外からやってきました。ですが今の社会は、高齢化や地場産業の衰退、災害など、多くの問題を抱え、経済力や政治力だけでは解決を望めなくなっています。そのなかで私たちには、目の前にあるものを見つめ直し、自分たちで楽しさを創造していくような力が求められてきていると思うんです」



建物の写真に生徒が思い思いの色を重ねるワーク。これもまた不思議な味わいがある。まわりに貼られたいいね！マークにはそれを見たほかの生徒の感想が記されている。



二人組や数人で対話をさせるときは、寡黙な生徒とよく話す生徒をペアにすることで黙ってしまいがちな生徒からも言葉を引き出すなど、組み合わせにも気を配る。

いままではできなかった
自分なりの表現がちょっとできるようになった



前列左より
岡崎里湖さん、岡本梨央さん、
峯下陽梨さん
後列左より
笠嶋亮佑さん、棟友葵衣さん

—「今津プロデュース」の授業をどうして取ると思ったのですか？

棟友さん：小中学校でも美術はやったけど、学校の外に出て地域とかかわるのが新しいと思って興味をもちました。

—「今津プロデュース」以外の浅野先生の授業はどんな感じでしたか？

峯下さん：みんなでわいわい意見を出しながら絵を描いたりしています。「こうしたほうがいいんじゃない？」「ここいいね」「この色どう思う？」とか。

笠嶋さん：グループで話し合っ—一緒に制作することもあります。最初に「こうしていいこう」とグループで考えて、それから制作に入るんです。

棟友さん：自分がいいと思っていないと

ころも、先生が「ここいいですね」と言ってくれるのがためになります。

—授業を受けて変わったと思うことはありますか？

岡本さん：想像力と創造力が豊かになったと思います。一つだけちょっとイヤなことがあって、それは浅野先生が、私がライバルと思っている子のことを、ベタ褒めすることです！

岡崎さん：いままではできなかったけれど、自分なりの表現をすることが、ちょっとできるようになったかな、と思います。こういう色で塗ろうかな、と思っても、前は無難な色にしていまいがちだったけど、いまはちょっとチャレンジできるようになりました。



いまや「たてじまアートプロジェクト」は、小さな子どもから高校生や大人までがかわる地元のイベントになった。

甲子園商店街に出現する。

2013年10月27日。生徒たちの創作を軸にして、今年も「たてじまアート」が新たな縁から生まれた『たてじまアート』で、関係する地域や人を元気にするアートプロジェクトと。

なかには「やらされ感」を抱く生徒もいる。「今津プロデュース」を受講した生徒が背負うプレッシャーは小さくない。商店街も巻き込んだ時間厳守のデザインボードの制作などに「できない」と弱気になる生徒も出てくる。それでもヒヤヒヤしながら我慢して見守ると、生徒一人ひとりが自分で考えて動き始めるという。その瞬間が、浅野先生にとってはうれしい。

う受験生が現れるようになった。

津高校への注目度も高まり、「アートプロジェクト」をしたくてこの高校を受けた」とい

1年、2年と活動が積み重なるなかで地域のひととの関係も深まり、商店街と共同の実行委員会も立ち上がった。西宮今

生徒はこう変わる

アートが場の魅力を照らし
生徒や地域をエンパワーする

る。だが、作品の展示や上演をして、商店街の人や地元の子から感謝されると、授業の印象は気になる。自分のしたこと

が「喜ばれている」ことに驚き、やってよかったと感慨を深める生徒がいる。「こんな反

プロジェクトは発展を続けていて、地元

の商店街が昔はいちご畑だったことを知る古

「アートが得意とするのは、社会で見過

だから浅野先生はこのアートプロジェクト

「地域の子どもたちと高校生との不思議

を軸にして、今年も「たてじまアート」が新



授業で生徒につけたい力

	知識	能力	意欲・態度
つけたい力	<p>創作技法（試行錯誤で学ぶのが基本）</p> <ul style="list-style-type: none"> 色の組み合わせ、遠近感のつけ方、道具の使い方などを学ぶ。正しい手法を教師が提示するというより、生徒が自由にやり、失敗のなから自分なりの手法を習得するのが基本とする。 <p>地域の歴史・文化</p> <ul style="list-style-type: none"> その場所から想像力をかきたてることを前提に生徒たちが地域の歴史や文化を調べて学ぶ。 	<p>つくる力（創造力）</p> <ul style="list-style-type: none"> 創造しようとする動機力を高めることを第一に、発想力、問題分析力、形や構成をまとめる力、見る力、素材や道具を使いこなす力などを伸ばす。 <p>かかわる力</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分のビジョンを思い描く力や、感じたことを言葉にする力、批評する力、他者が何を感じてどう見られるかを思い描く力などを伸ばす。 	<p>自分の存在を表現しようとする意欲</p> <ul style="list-style-type: none"> 技術やクオリティーを求めるとだけがアートではない。自分の存在や感じたことを自分なりに表現すれば、何かが変わることがある。生徒にその実感をもたらす、表現への足かせを外す。 <p>社会にかかわる意欲・責任感</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の行為が他者に何かをもたらすことを生徒が体験、社会にかかわる意欲と責任感を育む。
その力が将来にどう生きる？	<p>かかわる場や人に応じた創作ができる</p> <ul style="list-style-type: none"> 価値観が多様化し、過去の芸術作品の模倣より、その場に合わせたアートや多数の人の参加型アートが求められてきた社会で、ふさわしい技法を選んで、または生み出して創作できる。 <p>本人や住む場所への自尊感情が高まる</p> <ul style="list-style-type: none"> 地元の価値に気づき、そこで暮らす自分への誇りが生まれ、地域を盛り上げる意欲も生まれる。 	<p>課題の見える化・想いの共有が得意に</p> <ul style="list-style-type: none"> 企業や行政のプロジェクトで「課題の本質は「狙う客層は」といったことを言葉＋ビジュアルで示せる。デザイナーがよく担う役割で、関係者が課題やイメージを共有しやすくなる。 <p>コミュニティの楽しみを共有できる</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域や組織の全員で演じて全員で楽しむような場をつくれる。現代アートの方向性と重なる。 	<p>生きづらさに対して声をあげられる</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分や仲間が困っている、街や組織に課題がある。そんなときに、何とかしたいという想いを自分なりに表現して、まわりに発信できる。 <p>社会を自分たちで変えていける</p> <ul style="list-style-type: none"> 気になることがあったとき、自分で調べて課題を見つけ、できることをしようと思える。うまくいかないこともあるが少しずつ社会が変わる。